2019 年度　研究演習 II-18　卒業論文評

担当教員　牲川　波都季

日本人が外国人と共に居心地よく働いていくためのコミュニケーションの在り方とその成立要件について　胡子　奈々

胡子さんの卒業論文の執筆動機は，当初から自分が工場で働いたときの外国人と日本人との距離，さらにいうなら日本人による外国人への差別的態度にありました。こうした集団間での対立的関係はどうすれば解消できるのか。3 年生の間は，外国人労働者が日本で安心して働くための政策，人間関係づくりの心理，異言語に対するイメージといった様々な観点での解決方法を模索しました。ゼミ担当の私自身が，他者へのステレオタイプをなくし互恵的な関係性を作っていくためには，個々人の価値意識が重要という考えをもっていたため，そうした価値意識の明確化やその教育という方向で助言し，4 年生の春学期まではその流れで卒業論文を書いていくにはどうしたらよいかを考えていました。しかし，胡子さんの問題意識は，工場での経験という具体的な場から出てきており，価値意識というテーマは漠然としすぎているという思いを胡子さんはもっていたと思います。その段階を，胡子さんは外国人も働く工場で再度働くことによって，自分で越えていきました。そして，二度の工場勤務経験を比較し，外国人と日本人とがともに居心地よく働いていくための要件をまとめました。もっとも重要なポイントは，単純労働とはいえ完全な一人完結型の労働形態ではなく，わずかでも他者と協力して行うような作業が組みこまれていること，胡子さんの表現を借りれば，労働者が機械と同様にではなく人間として扱われていることが重要だということになります。また卒業論文での発見としてもう一つ特筆すべきは，1 回目と 2 回目の工場勤務の間に，胡子さん自身が接客業を通じて多様な人々に対応する経験を重ねており，卒論に取り組んできたこともあって外国人を一個人として捉えられるようになっていたという，自分自身の経験と意識の変化についても着目した点です。労働環境というシステムの改善案とともに，マジョリティである日本人の経験・意識の重要性を指摘したことで，多面性をもつ結論になりました。

2 度の工場勤務経験を丹念に思い起こし綴った記録は日記風でもあり，クラスメートからは研究らしくないという声もありました。外国人労働者とともにアルバイトなどを一緒にした経験をもつ日本人は多数いると思いますが，管見では実際がどんなでであるのかを同じ働き手の立場から詳らかにした報告した文献は見当たりません。外国人労働者に関する先行研究・文献のレビューをしっかりして，詳細すぎるほどの今回の記録の意義を訴えること，また先行研究・文献に照らして，記録の考察結果を分類・統合できればさらに一般化可能な結論になったのではないかと思います。が，それは外国人労働者問題というテーマに早期に絞り切れなかった，私の支援不足によるところもあります。

胡子さんの卒論は，3 年生のときから問題意識に対し，ずっと誠実にまっすぐに取り組んできた成果です。また，同学年や他学年のゼミ生に対して，丁寧でありながら率直に感想や質問をなげかけ，このゼミでは卒論のテーマに対し本気で取り組むのだという雰囲気づくりに大きく貢献してくれました。

教職の魅力とは　尾崎　亮太

尾崎さんは英語教員になることを目指し，学習支援や塾講師など教育現場での経験も重ねてきました。ゼミに入る前にカナダの語学学校で英語を学んできたということもあり，初めは英語教育の方法をテーマとして考えていましたが，同じ3年生や4年生のゼミ生のテーマ設定を知っていくうちに，自分が何について本当は考えていきたいのかをもう一度見つめ直し，教師という仕事の魅力に行きつきました。

ゼミで秋田合宿に行った際の私の子どもに手品をしてみせて喜ばせている様子からも，子どもの世界に一緒に入りつつ子どもに何かを教えていくことに，尾崎さんがとても自然な魅力を感じていることがうかがえました。根っからの子ども好き，教育好きと言えるだけに，教師という仕事を分析的に考えることは難しかったかもしれません。特に近年は，残業代や部活動指導，モンスターペアレンツの対応と，教職はブラックだというイメージが横行しており，3年生の終わりから尾崎さんが読み始めた教師論の文献でもいかに待遇に問題があるかという指摘が多かったようです。国は教育改革を進めるもそれに見合うだけの予算増加が見込めず，現場は疲弊，その状況が批判を呼びさらなる教育改革が命じられるという「悪魔のサイクル」は，大学をはじめとする高等教育でも起こっていることで，私にも身につまされる話でした。

ただ尾崎さんは，ここから教育政策の問題点の指摘や改革といった研究には進まず，家族や自分の高校時の担任教員へのインタビュー調査を通じ，教師という仕事の本来の魅力は何か，多忙な職務という現状を乗り越えるための工夫は何かを見つけだそうとしました。お母さんからは授業を子どもたちと作りあげていくことで仕事がどんどん楽しくなっていったこと，同僚や家族といった環境のサポートが得られてきたこと，担任教員からは現在の教職の多忙な現実と，だからこそリフレッシュする時間が充実していること，お姉さんからは同僚との協同的な関係と休息の時間の重要性を発見しました。そして最終的に，「子どものための」というやりがいがあるから，多忙であっても楽しむことができ満足できる仕事，それが教師だという結論を得ました。「様々な教師の実態や現状を見たうえで，教師という仕事が未だに輝いて見えることが今回の一番の収穫かもしれない」というまとめの一言，効いています。

他方で，これは私自身の研究でも反省すべき点なのですが，個々人の意識や努力を高く評価するがために，それを可能にする環境や制度，政策への批判的分析がもう少し必要でした。お母さんが同僚や家族に恵まれたからと言われていたのは，たまたま恵まれたからなのか，それとも教師を続けられる人は何らかの共通する社会資本や文化資本をもっているからなのか。また真に必要な教育とは何なのかということを考えた場合，各教師が楽しめるかどうか，仕事をこなせるかどうかという次元を超え，制度として改革すべきこともあるはずです。卒業後の教職への進路が決まっている尾崎さんには，これまで通り何事にも楽観的な姿勢を保ちながら，現場に自分を埋めきることなく，個人としてかつ制度としての教育を考え続けてもらいたいと思います。

「書く」文化とその未来　柏木　乃愛

乃愛さんは，手書き文化を残すという現在ではかなり主張の難しいテーマに取り組みました。パソコン・スマートフォンの文字は「感情」や「個性」を反映できないとする主張は，なんとなくわかるようでいて，文字であらわされる内容に着目することや，パソコン・スマホでの表現方法も多種多様にあるといったことからすると，ほかのゼミ生にはなかなか説得力をもちにくいようでした。進級論文では自分が通っていた書道教室の先生と対話し，生徒が減ってきているという現実にも直面しました。一方で乃愛さん自身は幼少期から文字を書くという行為に強い興味をもっており，書道教室や書道部，学校行事で活躍していた経験もあって，その楽しさに強い確信をもっていました。だからこそ，効率という面からはどうしても守勢に回らざるを得ない手書きという行為を，文化として残すべきだという主張は曲げず，どうすればその意義を伝えられるのか，またどうすれば残せるのかという一貫した問題意識で卒論執筆に臨んできたと思います。

その解決方法の一つは，書くという行為の意義を徹底的に考えてみることです。そこでいったんは著名な書家である石川九揚の書道論をまとめました。石川のいう「筆蝕」という概念は私もまったく初めて知ったものでしたが，手で文字を書くことを微粒子的律動として捉え，触れていく感覚というものが，乃愛さんの要約から伝わってきました。この論に基けば，手書きには効率では計れない意義があるということになりますが，文字を書くことがただ面倒だと捉えている人にとっては効率性を追究しないという主張自体が無意味と思えるかもしれません。そこで乃愛さんは，存続していくための具体的な方策を考えるべく，自分で日本書道ユネスコ登録推進協議会による調査報告を見つけ，学校教育での書道の普及や教師から見た意義付けをまとめました。その結果，書道教育は思ったほどすたれておらず，文化としての存続を求める声も強いこと，他方で，日常生活に活かされておらず定着しないという問題があることを見つけました。この問題を乗り越えるために，書道教育についての文献から，日常でありながら特別，特別でありながら日常と感じられるような，書道教育の可能性についてまとめました。ゼミでの議論への応答，文献のまとめ，そこから見出された問題を解決するための次の文献のまとめと，乃愛さんの卒論作成のプロセスは丁寧で着実なものでした。将来に書道教室の開設も考えていることから，手書き文化の存続は乃愛さんにとって切実な課題であり，そのことが一歩一歩積み上げていくような執筆過程につながったものと思います。

もしこの卒論を全部手書きで書くということになっていたら，執筆の過程はまったく異なっていたことでしょう。何を書くかだいぶ詰めてからでないと書き始めることは難しかったかもしれませんが，それはそれでメリットがありそうです。一口に効率と言っても，書く行為にかかる時間を問題にするのか，書く間の心理状態や書かれたものの質を問題にするのかにより，議論はまったく変わってくるでしょう。

物事を淡々と進めていくようでありながら，その先に明確な好みとビジョンをもっている乃愛さんに，ぜひ夢をかなえてほしいと願っています。

若者言葉の機能性　川口　美佳

川口さんはことばの変化をどこまで許容すべきかというテーマを考えていました。自分自身も含め多くの若者がSNS上や会話で略語や独特の表現をしており，現在は世代によりあまりにも違いがあるため問題ではないかという問いを投げかけました。ただどこまで許容するのかという問いは，ことばは変化していくのが当然ですので，何を基準にルールを定めるのかは定かではありません。そこで次に，若者言葉は自分にとって不可欠だが，公式的な場面でことばが思いつかないといったデメリットもあり，どうすべきかを考えていきたいということで，テーマのアイディアを出しました。そこで若者言葉として川口さんが挙げた例は，「り」「ま？」「卍」「すこ」「草」「わんちゃん」といったものであり，私にはまったく理解もできないことばが並んでいました。ゼミ生の中では，実はこうした若者言葉を聞いたことはあるが，使ったことはないという人が多数派で，そうした若者言葉になじめないという声がどちらかといえば強かったと思います。

そうした意見を聞いた川口さんは，その声を覆すべく若者言葉の機能・意義を研究していくことに決めました。この決定は3年生の夏休み前であり，夏休み後には早速この方針にかなう相手として，世代が違うにも関わらず川口さんたち若者に若者言葉で話しかけてくるアルバイト先の上司2人と対話活動を行いました。その結果，上司は孤独な作業になりがちなアルバイトの現場で，若者との会話を促進し仲間意識を形成するために，進んで若者言葉を使っていたこと，同時に実際の使用においては相手との距離感を図った上で成り立つものだということを発見しました。

この進級論文の発見はそのまま卒論にも活かされるますが，卒論ではまず若者言葉の定義や歴史を先行文献を用いて概括しました。その作業をしながら，川口さんは友人たちとの会話を録音・文字化しました。そしてこの第1次データを分析することで，若者言葉の使用の実際とその機能について考察を行いました。こうしたデータがあればよいというのは私からも話したと思いますが，実行しようとすると，場の設定や文字化には大変な時間と手間がかかります。これは一度やってみないとわからないことで，正直なところ本当に実行に移せるのか，半身半疑でした。しかし川口さんはやりとげ，さらに談話分析の著名な先行研究に倣い文字化するなど，私の予想をはるかに超えた質のデータを集めました。最終的には，集めたデータを，先行研究の若者言葉の機能分類に基づき考察しました。中には「わかりみがマリアナ海溝」といった，実際に会話で使用されているとはにわかには信じがたい表現や，「バッジョイ」「やばたにえん」といった友人同士でしか機能しない造語もありました。若者言葉は，同じ若者同士であっても親密性が高くなければ使用しにくく，それだけに若者言葉を使えるということが親密性の高さを表している，違う世代の者同士であればその間の親密性を高める機能がある，シチュエーションに合わせニュアンスを伝えるという繊細な使い方がされている。こうした結論は，周到な文献・データ収集と分析にもとづいてなされたもので見事でした。

あとで読み返してみると文字の誤字・脱字が目立ち，大変残念ながら学部の卒論の賞候補に出せませんでした。私がもっと細かく読んでいればと悔やまれます。

ことばは単にメッセージを運ぶのではなく，ことばを投げかけるその仕方が人々の関係を作り，それがやがて社会の構築にもつながっていきます。それは偶然に起こることが多いのですが，根底にはこういうふうに作ってきたいという人の思いが存在します。川口さんは将来どのような人間関係，社会を築いていくのでしょうか。楽しみです。

英語に対する壁をなくす教育法について　北川　樹

樹さんはゼミ選択の当初から，英語を学び使いたいという動機を高めるための教育方法がテーマでした。3 年生の間は，英語を主要言語とする国民国家の文化的コンテンツが，英語学習・利用の動機を高めるのではないかという仮説で，問題意識を作っていこうとしていました。進級論文の対話でも，そうした方法を用いていた高校時の英語担当教員に教育方法上の工夫を尋ねました。担当教員の語りを今改めて読み返すと，英語圏の文化に限らず教科書の題材に関連したコンテンツの利用，異質なものへの柔軟な心構えや日本についての教養など，経験に基づく工夫を話されていたことがわかります。

このこともあって，樹さんは卒論に取り組む段階になり，「文化」から「動機づけ」へとテーマを変えました。テーマ変更のきっかけとしては，ほかのゼミ生から，高校段階で何か楽しいコンテンツで学習を動機づけようとしても，すでに英語嫌いになっている場合は効果がないのではないか，進学校であれば受験に無関係な内容は無駄だとみなされるのではないかという，各自の実体験から来るコメントも大きかったと思います。

英語学習・使用への動機を高めることが研究目的であるならば，その方法を文化に絞る必要はなく，また動機の中身や強弱にも多様性があります。そこで樹さんは，そもそも英語好き，英語嫌いはなぜ生まれるのかと考え，まずは二人の友人にインタビュー調査を行い，その解答を踏まえてアンケートを作り実施しました。その結果，英語を使うことが嫌いと答えた人の理由は「難しいから」が非常に多く，好きと答えた人は「特に理由はない」を除けば「目的があるから」が一番多いという結果になりました。そして好きにさせるための環境づくりとしては，教員の教え方や躓きの解決，教員からの評価，成績による評価，外国人教員の存在，などが浮かび上がってきました。

この結果を樹さんは，先行研究を用いて，英語を難しく考えない＝内発的な学習意欲，英語を使う目的をもつ＝自己実現のための学習意欲，と解釈するとともに，最後に教育方法上の工夫を提案しました。アンケート作りと調査に思いのほか時間がかかり，締め切りまでの切迫した中にあって，理解しやすい形でまとめた点は評価できます。ただし，英語を難しく考えないことが，内発的な学習意欲と言えるのか，もっと「うれしい」「楽しい」といったことに結び付くポジティブな感情を伴う必要があるのではないか，英語を使う目的をもつというのも，自己実現のための学習意欲とは限らないのではないか，たとえば洋楽の歌詞を理解するといった目的であれば内発的な意欲に近いのではないか，といった疑問もあります。

こうした学習意欲と学習環境とは強く結びついていると考えられますが，樹さんが評価する自律的な学習という場合，環境を自分自身で用意できるようになることも含まれています。しかし，学習者自身も自分の意欲・動機に気づいていない場合があり，それは教員も事前に知ることはできません。また教員自身にも，こういうことを教育すべきという信念がありますので，それと学習者自身の信念や動機との関係性という問題もあります。はたまたなんで英語でなければならないのか，という根本的疑問も。一応言語教育が専門の私のゼミで，教育方法をテーマにした唯一の卒論だったので，ちょっとコメントが細かくなりすぎたかもしれません。樹さんは学祭の委員や SCS の活動に熱心で，誰かのために何かをすることに強い喜びを見出していたように思います。そうしたサポーティブな姿勢が，本ゼミの，なんでも質問してよいという特色づくりにも貢献してくれました。

神戸市の外国人観光客増加への道

権　炫喆

権さんが 2 年生のときに日本語授業を担当し，その際も学術的関心が授業のテーマだったので，権さんの研究活動はその時以来ずっと見てきたことになります。2 年生時点では，外国人旅行者が日本で一人でも行動しやすくするための IT 技術の利用について関心をもっていました。しかしそうした技術についての知見が足りないということで，改めて，自分が好きな旅行をテーマにすることにしました。

旅行というテーマは卒論提出まで変わらなかったものの，ゼミに入ってから，旅行と言語，旅行と文化，旅行を楽しむ方法，人の性格と旅行スタイル，外国人観光客を集めるための方法，神戸市に外国人観光客を増加させるための方法と，目まぐるしく変わっていきました。私のゼミでは，自分が本当に書きたいこと，言い換えれば，何らかの自分自身の問題を解決したり，自分自身が大変熱心なことについてほかの人に伝えるためのテーマ選びを求めます。そうすることが，卒論執筆の動機を支え，テーマを明確化し，他者に対しても説得力をもつ論文につながるからです。テーマ選びのためには，自分自身が何を問題に思っているのか，自分自身が何を大切にしているのかを探っていかなければならないのですが，この過程が難しい場合も多く，権さんも苦労しました。

オンラインゲームに興味をもっている，日本語を学び使っているという権さんにとっては，そうした興味・経験から，AR の利用，言語習得と旅行を結びつけるのは自然なことでした。一方，権さんが本当にそうしたテーマに取り組みたいのか，取り組む必要があるのか，世の中ではやっている，私のゼミだからという，外的な要因で選んだ部分が大きいのではないかという問題がありました。言語習得による旅行の満足度と一口に言っても，誰にとってのどのような満足度なのか。権さん自身は一人旅，しかも自分の興味がある場所で見聞を広めるのが好きで，特に旅行先でコミュニケーションは望んでいないとのこと。であれば，スマートフォンなどのアプリを使うということも考えられ，旅行前に言語習得をしておく必然性はないように思われました。そうした指摘がゼミ生からあり，自分自身の経験と関心，外国人留学生という立場を活かすことができると同時に，大阪や京都に比べ外国人観光客が少ない兵庫県という，より大きな問題に結びつくテーマへと至りました。兵庫県の中でも神戸市は権さんがアルバイトしている場所であり，夜景や自然，ショッピングする場所として，自分でもとても気に入っている場所でした。UCC のコーヒー博物館などは神戸の観光場所としてメジャーとは言えませんし，人と防災未来センターは遊び目的の観光であればあまり選択肢に入らない場所のように思います。しかし権さんは自分が体験したことに基づき，外国人旅行者にぜひ訪れてほしい場所として選び，その理由も詳しく描き出しました。この場所の選び方は，権さんの考えや興味を反映したとてもユニークなものです。そのユニークさを活かすことがそのまま研究になるのですが，自分がいかに特別な視点をもっているのかに気づくことは誰にとっても難しいことのようです。2 年生のときからの歩みを振り返ったとき，ほかのゼミ生や私からのコメントをどう受けとめてよいかに悩みつつも，何とか受けとめそのたびにテーマを変え，最終的にはそうした他者の意見を存分に生かした個性的な卒論に仕上がりました。

外国にルーツのある子ども達への日本語学習支援～ボランティア活動から見えた地域のボランティア団体と学校の在り方～

佐野　花奈江

佐野さんは中学生の時に海外にルーツのある子どもと同級生になり，その時の学校・教員の対応に疑問をもったこと，大学に入り海外にルーツのある子どもたちの学習支援ボランティアをしてきたことから，ボランティアと学校の連携をテーマにしました。

最初は学校での日本語教育の支援のあり方について考えようとしていましたが，英語教員志望の佐野さんがこのテーマに取り組む必要性は何かといったゼミ生との議論や，ボランティアの教室主催者との対話活動を経て，ボランティアの支援を学校が活かすにはという，より自分自身の活動に基いた問題意識へと変わっていきました。佐野さんにとって，ボランティアの教室を自分の居場所と捉える子どもたちや，子どもたち一人ひとりの状況に即し学習や進路決定の支援をしているボランティア運営者の存在が大きい意味を持っていまいた。なぜ学校は，こうした活動を行うボランティアと連携して子どもたちのよりよい未来のために努めないのかという憤りもあったことでしょう。

海外と何らかのつながりをもっていたり，日本語能力が十分でない子どもたちの学習支援は，日本語教育や国際教育，移民についての社会学等でも取り上げられており，研究の蓄積もかなりあります。佐野さんは先行研究を読み，学校がボランティアと連携し地域ぐるみで支援することの重要性は指摘されているものの，どのように連携していけばよいのかを具体的に論じたものはないという問題を指摘しました。そして，兵庫県を対象に，基礎データである日本語指導が必要な児童生徒の地域別人数と地域の日本語教室の数・場所を確認しました。そのうえで，外国人集住地域である芦屋市と神戸市，散在地域である三田市のボランティア団体の主導的立場にある方々にインタビュー調査を実施しました。その結果，神戸市は比較的連携が進んでいるが一部の積極的な学校や優遇される立場にある子どもの支援に偏っていること，芦屋市や三田市では連携が進んでいないことが明らかになりました。また各現場で認識されている学校側の多くの問題（たとえば，外国人であっても学校で常勤講師を務めることはできるのに，知識不足で教員にはなれないと進路指導される，海外にルーツがあるという特殊な位置づけへの理解がなく，成績の内申点が低くつけられてしまい進学に支障をきたす）も挙げられました。最終的に卒論では，集住地域では学校と地域の教室との役割分業や，学校全体の問題意識の向上，情報交換機会の増加を提案し，散在地域では長年の経験をもつ地域の教室の知見を経験不足の各学校が取り入れていくことを提案しました。

先行研究の総括に時間がかかり，三つのインタビューのうち二つは時間的に切迫した状況での実施になりました。そのため量的にも質的にも豊かな内容をもったインタビューの結果を，提案に十分に生かしきれなかった部分が残りました。インタビューの中で大きな焦点となっていたのは，学校卒業後の進学・進路の問題と，学校の教員が多忙すぎて海外にルーツをもつ子どもたちに目配りをする余裕がないということでした。ボランティア教室と学校は，子どもの将来の選択肢を狭めないためにいかに連携すべきか，といったテーマに焦点化するとデータと結論の結びつきがより深まったかもしれません。卒論の時点でもう一度，データ，理論，自分の問題意識との間に往還と更新があれば・・・　教員になるという夢がかなったあかつきにも，これまで同様の誠実さをもって考え続けていってもらえたらと思います。

e-sportsの将来性　宍倉　莉央

莉央さんは2年間，一貫して「e-sportsの将来性」で論文作成を進めてきました。卒論ではテーマの理由として，小さいころからゲームに親しんできたこと，高校生のときにインターネットでe-sportsを見たこと，親世代以上に，ゲームをプロスポーツとしては受け入れられないことなどを書いています。ここでは「親世代」と一般化されていますが，莉央さんも家庭でゲームに強く反対されたこともあったのではないでしょうか。

私自身もいまだゲームに時間を使うことに直観的には賛同できません。ゼミでも時間の無駄になるのではないか，ゲーム依存は一種の病気ではないかなどという意見が多数出されました。莉央さんは，将来はオリンピック競技になる可能性もあるにもかかわらず，日本での認知が進んでいないということを問題視しているのですが，ごく身近な同世代からも共感を得ることは難しいようでした。そこで，まったくゲームに興味がない人に対し，どのようにe-sportsの将来性を訴えていくのかを考え始めました。進級論文では知人のプロゲーマーと対話を行い，トレーニングや競技者としての寿命が短いといったプロの世界の厳しさ，スマートフォンを世代を問わずゲームに惹きつける入り口にするというアイディアなどを聞くことができました。プロゲーマーの実際の世界は他のゼミ生も知らなったもので，その厳しさが通常のスポーツと同じだということが伝わりました。この対話は卒論の一部にも組み込まれていきますが，卒論ではまず，e-sportsについての最新かつ代表的な文献3冊を取り上げます。その中で，現実と非現実があり，現実こそが本物だというこれまでの世界観が，非現実も本物だという世界観へと転換していくという指摘が，莉央さん自身にもなかった視点として述べられています。バーチャルな世界よりもリアルな世界での活躍が重視される価値観はいまだに根強いですが，それを転換させる指摘であり，私にとっても印象的でした。この文献レビューの後，進級論文の対話を用いたプロゲーマーの実態紹介，e-sports先進国である韓国と日本の比較，他のスポーツとの比較を行い，世界的に普及しつつあるが依存症という問題の指摘もある中で，幅広い世代の理解が進んだ暁には茶の間でe-sportsを楽しむ光景が当たり前になっているかもしれないと卒論本文を締めくくりました。

他のスポーツとの比較の部分では，マイナスからプラスにイメージや扱いが転じたスポーツを参考にすべく，スケートボードの歴史がまとめられています。当初は，勝負師が家族を泣かせてのめりこむという，私の勝手な将棋イメージから，将棋との比較を勧めたのですが，莉央さんが文献で調べてみると賭博としての将棋と競技としての将棋は別々に存在してきたということで，スケートボードへと比較対象を変えました。こうしたことは調査を進める中で初めてわかってくることで，研究論文を書く際にはよくあることです。ただ，時間が限られた中で卒業論文を書くというときに，書きながら新しいことに気づいたからといって取り上げる文献を変えて論じ直すということはなかなかできないことだと思います。莉央さんは，スケートボードを先行事例として選び直し，ゲームに親しんだ世代が行政を動かせる地位に就いたとき，e-sportsも普及すると指摘しました。やみくもにe-sports自体の魅力を描くのではなく，どうすれば普及するのかを現実的でクールな視点で捉えたと思います。莉央さんは，バーチャルな世界に魅力を感じ冷静に物事を捉えていると同時に，一つのテーマに真摯に取り組み，ゼミ生同士のやりとり・付き合いというリアルな関係性も大事にしており，人間の多面性を改めて教えてくれました。

客室乗務員がより健康的に働き続けるためには～日系大手２社の実例から考える～　嶋本　弥生

弥生さんは，最終的には就職先の航空業界，特に客室乗務員の就労問題をテーマとして卒論を仕上げました。そこに至るまでにはテーマの変更が繰り返されましたが，今振り返ってみると，出発点には理想の女性像を見つけるということがあったような気がします。最初はアジアと欧米の理想女性の違いというアイディアを出しましたが，自分自身との関係を問われ，次は化粧によって性格は変わるのかというテーマを提案しました。男性も化粧によりストレスが軽減するという心理学の実験結果などはとても興味深いものでしたが，化粧でストレスを解消する，性格が変わるということが，弥生さんのどのような問題解決に結びつくかという点で悩み，一転，強く就職を希望していた航空業界について調べるということになりました。

航空業界の展望という漠然とした問題設定から始まって，自分がそこで働くことを考えたときに航空業界で女性がいかにキャリア形成していくのかにテーマが絞られ，進級論文もそのテーマで書くことになりました。しかし進級論文の対話相手の韓国出身留学生から，結婚・出産したら仕事を辞めたり休んだりするという，従来の日本女性の仕事の仕方について疑問をつきつけられ，いったんは日本における女性と仕事というテーマを考えました。その後就職活動を経て，客室乗務員になることが決まりました。それまでは航空業界について調べると言っても，特定の航空会社を批判するような内容になっては就職にも不利なのではないかといった心配が，弥生さんの口から聞かれたこともありました。就職が決まったということで，改めて今の自分にとっての問題関心を考え，単なる業界の展望ではなく，客室乗務員として健康的に働き続けるためにはというテーマに焦点化することにしました。その結果，日本を代表する日本航空と全日空を取り上げ，各社の待遇をまとめたのち，過密スケジュール等による身体的疲労と「感情労働」であることから来る精神的疲労について指摘しました。「感情労働」ということばは聞いたことがありましたが，その問題提起者であるホックシールドが特に客室乗務員を例にその問題を論じていたことは，弥生さんのまとめで初めて知りました。サービスを提供するときの感情の様式そのものがサービスの一部，自分の仕事を愛しているように見えることが仕事の一部，といったホックシールドの分析はおそろしいようですが非常に説得力があります。その後，弥生さんは，客室乗務員の労働災害裁判について文献からまとめ，また弥生さんとは違う航空会社に就職が決まった友人へのインタビューも行いました。その結果，近年は客室乗務員のあり方も変わり「感情労働」という特質も変わってきた可能性があることなどの気づきがありました。最後に改善策として，指示系統の見直しや体調不良による交代の容易化などを外資系航空会社との比較から指摘し，企業と個人両面から身体的・精神的疲労の軽減を図るための方策を提案しました。航空会社は近年経営上の合理化を進めており，そのことと客室乗務員の待遇・労働環境向上とを同時に満たすことは難しいでしょう。日本航空の経営破たんと再建にしぼって，さらに具体的な問題点を考察してもよかったとは思います。他方で，自分が近く就く仕事の課題を見つめ，自分なりに対応できることを考えるということは，できるようでできないことです。理想の女性像という出発点から入って，自分自身の未来，しかもそこで向き合うことになるかもしれない就労問題という，具体的かつ厳しい課題に取り組んだ姿勢を讃えたいと思います。

経営面から見た歯科業界と医院マネジメント　竹安　貢紅

貢紅さんは，自分にとって真に考えたいテーマを見つけるようにという私の方針から，何をテーマにするか非常に悩み，なかなかしぼることの難しかったゼミ生の一人です。自分とって考えたいテーマと言っても，通常最初の段階で出てくるのは，これまでの教育経験やメディア情報に基づいた社会問題，または自分のごく個人的な悩みや望みといったものになりやすいです。後者の方が自分自身の経験や思いから出ているので真に考えたいテーマと言いやすいようですが，本当にそれが真に突き詰めていくべき問いなのかをよく考えてみると別の問いのほうがふさわしいことに気付くこともあります。

貢紅さんの場合も，言語学から，恋愛・結婚・妊娠，年の差カップルの恋愛・結婚，学歴と就職，就労が不要な場合の女性にとっての就労動機，歯科医院の経営マネージメントと，特に 3 年生の間はめまぐるしくテーマが変わっていきました。これらのテーマは，その時々に貢紅さんがぶつかっている悩みに関係している場合が多く，ゼミでの議論でも悩み相談のようなやりとりがあったことを覚えています。

進級論文時点では，経済的に就労が必須ではない女性にとっての就労動機がテーマとなりました。就職活動する必要がないという貢紅さんの特殊な環境は，同年代の学生からは男女問わずあまり共感が得られないか，反発さえもたれかねないもので，そうした中で就労する必然性がない場合，それでも女性は働くのかという問いはとても面白い問題設定でした。進級論文の対話の中には，女性が就労することが今は評価されているがされていない時代もあったという，私にとっては興味深い指摘が見られます。高度な専門性が求められる職を希望している人であっても，働かなくていいならそうしたいという発言も見られ，対話相手の本音に迫ることができたように思います。

こうした発見から，女性の就労意識の時代的変遷といったテーマに行くのかと思いきや，貢紅さんは，実際の自分の将来に必要な調査として，歯科医院経営というテーマに行きつきました。具体的には，まず個人の歯科医院をめぐる一般的な現状を統計データや文献からまとめ，次に特定地域で開業すると仮定して，その地域の居住者の特徴や医療制度を調べたました。さらに，自身の歯科医院でのアルバイト経験をフィールドワークとして，一日の行動を振り返り丹念に書いていき，そこから発見したことを，【患者さんからの信頼を得る】【清潔で安全な環境づくり】【生産性の最適化が産む X 歯科医院の経営サイクル】といったタグを付けながらまとめていきました。このアルバイト経験の記述については，それと結び付ける形で，特定地域の環境・ニーズに対する解決方法を提示できれば，論理的一貫性がより高まったとは思いますが，貢紅さんにとっては自分が調べたいことをまとめることができた卒論に仕上がったのではないでしょうか。

総合政策学部の学びを実りあるものにするということにかなり悩んでいた期間を経て，ここまでたどり着きました。貢紅さんの卒論執筆プロセスは，ゼミで率直に議論をつづけていけばやがてテーマは浮かび上がってくること，また，ごく私的に思える事柄でも研究テーマになりうることを示してくれたと思います。

外国人が鉄道を利用する際に困難のないサービスとは何か　手島　智輝

智輝さんがゼミに入ったきっかけは日本語教育への興味でしたが，自分の本当の関心と結びつくテーマをという本ゼミの方針から，鉄道と外国人に関わる話題へとテーマを変えました。この基本的な方針は2年間一貫しており，鉄道研究会で活動してきた智輝さんは，外国人旅行客が急増する近年の状況の中で，外国人にとって駅や鉄道を利用しやすくするにはということを考えてつづけました。最初に思いついたことは，もっぱら日本人の駅員が駅で対応していることから，外国人を雇用すればもっと円滑な対応ができるのではないかということでした。ただ，対黒人の対応が必要な観光地は多数あり，田舎の駅にまで必ず外国人を配置するのは現実的ではないのでは，といった指摘がゼミでありました。

そこで，こうしたアイディアが出てきた問題意識の根幹に立ち返り，外国人がもう一度日本を訪れたくなるような鉄道サービスにテーマを変えました。そして，進級論文に向け，外国人留学生に駅や鉄道の利用に際し感じた難しさを尋ねました。智輝さんはこれまでも駅で困っている外国人に話しかけ手助けしたことがあり，スマホなどの機器だけではなく人が人を手助けする必要もあるのではないかと考えていました。対話相手の留学生は，スマホがなければ駅員に聞く，人に聞ける方が不安が減ると答えており，智輝さんの予想に合った答えをもらえたようです。

最終的な卒論のテーマは焦点を絞り，外国人が困難なく鉄道利用ができるためのサービスのあり方に定めました。まず訪日外国人数などの現状をまとめたのち，各鉄道会社によるインバウンド増加への対応方法を概括しました。これによりタブレット端末や通訳・イラストが利用できる端末，英会話研修の実施など，各社の取り組みの大体の姿がわかりました。智輝さんの卒論で高く評価できるのは，長期にわたるフィールド調査を実施し自分自身のデータ（第1次データ）を集めたことです。地元大阪で外国人がよく利用する駅3カ所（大阪公園駅（JR），難波駅（大阪難波駅（近鉄），南海なんば駅，大阪メトロなんば駅），天王寺駅（JR））で，4日間から7日間の時間をかけ，利用している外国人観光客の特徴や対応デスクの位置・対応方法，掲示の方法などを観察によって把握しました。さらに観光客に直接声をかけ話を聞く調査も行いました。こうした足と時間を使った調査の結果，大阪城公園駅には外国人対応デスクはないが大阪城がほぼ唯一の目的地だからではないか，一方，駅周辺の飲食店は多言語表記をするなど工夫が見られたけれど，日本語を学習中の外国人にとっては多言語表記はマイナス面でもあるといった発見をしています。また利用客の多い難波駅では，鉄道各社が外国人対応デスクを設け，中国語や韓国語が話せる者の配置もあるとのことです。利用者によれば，案内板での掲示でも理解できるが直接人に確認したほうが安心するということで，駅員がさまざまな機器を利用する場合も多いとはいえ，顔を合わせての対応が不可欠かつ有効であることがわかりました。また，智輝さんは駅の看板や電車の幕を記録・分析し，視覚情報もまとめました。これらの調査結果を踏まえ，視覚情報での案内がうまくいっていない，アナウンス・文字表記がわかりにくいといった問題が残っていることを指摘しています。鉄道について広く深い見識と興味を持ち，さらにまったくの他人であっても語り掛け話を聞くことをいとわない，むしろそれを楽しむという，智輝さんの好みと性格が存分に生かされた卒論となりました。自分のペースを守っているようで，他者の話を取り込みながら考えていく，そうした態度をこれからも大切にしてほしいと思います。

中学生の不登校の現状と要因―中学校卒業後の進学の選択肢拡大案―　中川　真里奈

中川さんのテーマは，不登校の原因と社会的自立という核は2年間変わりませんでした。ただその内容については，途中まではそのための支援方法を論じる予定でしたが，卒論では，不登校になった中学生にとっての選択肢拡大を着地点とすることになりました。ゼミでは，なぜ不登校になるのかという要因について尋ねられることが多かったように思います。私自身も含め不登校ということをわがこととして思い描いたことのない者にとって，これといった要因があるというよりも，ふとしたきっかけで少し学校から離れると，自分の中でも環境的にも戻るという選択肢がかなり難しくなっていくというのは，中川さん一人の経験とは言え不登校の実際をよく伝えてくれたと思います。

不登校の支援といった場合，学校に戻すということを思い浮かべがちです。しかし進級論文のための対話でも，いったん学校から離れると塾も含め同じ学校のメンバーがいる場には非常に戻りずらいことがわかります。中川さん自身は高校進学時に地元から離れるという選択をしましたが，ほかにも選択肢はないのか，またそうしたことを考えるためには不登校の現状把握が必要ということで，卒論では国が行った調査の概括から始めました。中学生の不登校に着目すると，小学校に比べ人数が非常に増えることや，中学校で不登校だった子どもが高校に進学したり就職する率が低いことがわかりました。また不登校の要因として，過去の調査では，本人に関わる要因の下位区分として学校・家庭に関わる要因があるとされていますが，中川さんは，学校・家庭に関わる要因が，不安感や無気力という本人の状態を生み，それが不登校につながるのではないかとコメントしています。そして学校に関わる要因として中学校ならではの環境変化を挙げるとともに，エリクソンのアイデンティティ論もまとめました。青年期特有の，アイデンティティ形成期であるにもかかわらずそれが拡散しやすい時期でもあることから，中川さんは学校という社会の中でアイデンティティの拡散が起こり不登校になるが，それが周囲に受け入れられないとさらにアイデンティティの確立が難しくなるというプロセスを見出しています。そして不登校の中学生がアイデンティティを確立するためには「他者から強制されていない他者との関わり」経験をもつことが必要だとします。

中川さんは国の調査結果を積極的に利用する研究スタイルをとっていたので，エリクソンの理論を用いて不登校の子どもたちの心理に着目するという流れは，私には少し唐突に感じられました。ですが，卒論を書き上げて，中川さんがなぜ自分が不登校になったのかが理解できたと話したとき，そのためのエリクソンだったのかと納得しました。また子どもの心理状況を要因の一つとしながらも，中川さんは，心理カウンセラーの学校配置といった支援方法は提案しませんでした。社会的自立を果たすためには大学進学が必要であるとして，中学卒業後の全日制高校以外の進路―通信制高校，定時制高校，高校卒業認定試験―を具体的に示すということを選びました。こうした場では「他者から強制されていない他者との関わり」経験をもちにくいのではと私が問いかけたところ，そこは他の集まりなどでももてるという答えで，なるほどと思いました。未成年であっても学校だけが他者とつながりをもつ場ではない，むしろ自分が望む形で将来の進路の道を増やすための方法を提案するというのは，中川さんの経験と信念に裏打ちされた，具体的な研究成果です。そうした姿勢はゼミの議論でも貫徹されており，誰に対しても自分のスタンスは曲げず，同時に誰に対してもその人が何を考えているのかを把捉しようとする，そのバランスのとり方はとてもユニークでありがたかったです。

「人を動かす」から説く組織運営　原田　篤

篤さんは，3年生のゼミ開始後，大きくテーマを変えてきました。当初からテーマを自由に決められることが私のゼミを選んだ動機だったようですが，最初は特に強い関心を持つテーマはないということでした。そういう場合は，自分がとても凝っている趣味や非常に悩んでいることといったところから考え始めてみたらよいという助言を受け，最初は趣味の延長として日米映画に見られる恋愛観の比較，またその分析から love という概念について考えてみたいということでした。ただ，クラスの中で，これを分析した結果何を伝えたいのかという疑問が出され，喫煙場所を制限するという社会情勢と自身が喫煙者でもあることから，喫煙者と非喫煙者の共存にテーマを変えました。ところがゼミで議論を重ねていくと，篤さん自身が喫煙習慣を必ずしもよいととらえておらず，また，喫煙者の中でも非常識な場所で吸う人がいることに怒りを感じていることがわかりました。対話の成果もあり，喫煙者が意識を変えたほうが良いということで，このテーマについては進級論文でいったん自分の答えが出たということでした。

そこで春休み以降に改めてテーマを考え直すことになりました。就職活動を経た篤さんは，社会人生活でよい人間関係を築くということに関心を移していき，その関心とフットサル・サークルの代表を務めていたという自分の経験を接続させる形で，最後は組織運営に必要なものにテーマを決めました。3年生の時点でもサークル運営は篤さんの生活ではかなりの重みをもっていたと思いますが，そのことと卒論のための研究課題というものとを結びつけて考えられなかったのかもしれません。私自身は，どれほど抽象度が高そうな研究テーマであっても，研究者個人の経験や思想とどこかで結びついている部分があり，その追及の形がテーマとして現れるという気がしています。あるいは，本当に全く研究者自身というものと切り離した研究というものがあるとすれば，それは誰にとっても意味のない研究なのではないかとも思います。

篤さんが卒論で実際に行ったのは，カーネギーの『人を動かす』から自分にとって重要な部分を抜粋・要約し，それとサークル運営時の工夫や困難を結びつけるという作業でした。途中，就職先からの求めで忙しくなり少し心配しましたが，最後は集中的に書き進めていきました。そして，人を動かすためには本心から相手に心を寄せることがポイントであると結論付けるとともに，ここからは人を動かそうとしている人の気持ちもわかるという，人身操作術を冷静に突き放してみるような考察も加えました。また，新しいアイディアには批判がつきものだが，これを相手に思いつかせるように仕向けることで，アイディアの実現につなげるような，そうした社会人になりたいとも述べています。アイディアそのものも自分ひとりからではなく他者とともに生み出されていくと思います。そうしたプロセスの結果としてアイディアを生み実現しようとするときには，相手を仕向けると言った操作は不要になるかもしれません。篤さんが社会人というとき，その社会は企業を指し上下関係がつきものとみなされているようです。しかし，上下関係を前提としない社会もあります。他者とともにある場はすべて社会で，家族でさえも一つの社会です。篤さんにはぜひ，他者と一緒に自分なりの社会を築いていってほしいと思います。